

初級からの待遇表現教育

高 沢 美 和

1. 外国人の日本語

1-1. 待遇表現上問題のある外国人の日本語の表現

平成7年度の『国語に関する世論調査』で、「外国人の話す日本語は、どのような日本語が望ましいと思うか」という調査がなされた。その結果は、「外国人だから、意思が通じさえすれば多少変な日本語でもかまわない」が58.6%、「…どんな日本語でもかまわない」が24.2%となっており、外国人の話す日本語に対する寛容さが窺える。

外国人が完璧な日本語を話さなくても当然だと、筆者も思う。では、外国人がどのような日本語の間違いをしても日本人は平気でいられるのだろうか。『月刊日本語』の1993年11月号で、「先生、あなたはよくできました——日本語教師がとまどう外国人の日本語」という特集が組まれている。日常的に外国人と接する日本語教師が、外国人の話すどんな日本語に違和感や不快感を持つかというアンケート調査があった。回答の一部を紹介する。

- ・教師の意思、欲求をたずねる言い方……先生はこの宿題を見たいですか／先生もジュースが欲しいですか／今日、お金が欲しいですか（授業料を払う、といっている）など
- ・あなたの多用……（あなたはよく教えました／先生、あなたは忙しいですか、など）
- ・〈「～てください」を使えないため〉先生は見ます、書きます、など
- ・先生、私の住所をわかっていますか
- ・〈授業中に〉それはわかっているから、もういいです／先生は違っています／違っていますよ！／もう、わかりました
- ・〈受験準備で色々面倒を見てあげた学生が〉先生、なかなか親切ですね
- ・〈教師〉夏休みでしばらく会えなくなるけど、お元気で。〈学生〉そちらこそ
- ・先生、あなたは給料いくらですか
- ・先生、頼みましたよ

- ・〈教師〉合格してよかったね 〈学生〉当然ですよ
- ・私は買い物に行くんですから、早退します
- ・来週の進路相談ですけど、私はちょっと忙しいんですから来ることできないんです。他の日に変えましょうか

上記の例は日本語教師に対する日本語学習者の発言であるが、確かにこのようなことを言われたら多少なりともムツとするであろう。また、外国人がこのような表現を日本語教師にのみ使っているとは考えにくい。教室から外の日本社会に出て、このような表現、その場にふさわしくない日本語を使ってしまうことは十分あり得ることであり、そこでもコミュニケーションの問題を生じていることだろう。

これらの例に共通して言えることは、一見文法の間違いというものは見当たらないけれども、相手を不愉快にさせる可能性が高く、日本人ならそのようには言わないだろうということである。中には日本人でもこのような言い方をする人もいるかもしれないが、コミュニケーションに問題を生じるだろうことには変わりない。

1-2. 待遇表現教育の重要性

文法の間違いがないのに、コミュニケーションがうまくいかないのはなぜだろうか。それは、コミュニケーションとは文法だけで成り立っているものではないからである。よく考えれば当然のことだが、あまり意識されないことである。つまり、何かを話すとき、どんなに文法的に正しい文を作っても、「何を言うべきか」や「何を言うべきではないか」、「いつ言うべきか」、「いつ言うべきではないか」などのルール——待遇表現¹のルール——に違反してしまうと、コミュニケーション上の問題を生じるのである。

外国人が日本語の待遇表現をうまく使えないのは、日本語教育の中の待遇表現の扱いに問題があるということなのではないだろうか。これまでの語学教育では、文法や語彙、発音、表記のルールを教えることが中心に据えられていて、文法外のコミュニケーションについては教えられないか、教えられたとしても「おまけ」として出されることが多かった（ネウストプニー1982）。しかし、文法の誤りを起こすことで問題と

¹ 待遇表現とは、人が言葉を発するとき、対人関係への顧慮のもと、さまざまな条件——心理的状態、場所、人間関係、その他——により使い分けるその言語表現のことであり、送り手が、受け手や話題の人物、出来事をどう「待遇」するのかということである。ある出来事を表すとき、「先生がおいでになりましたよ」「田中さんが来たよ」「嫌なやつが来やがったぞ」などと、送り手が素材や受け手をどのように捉えているかということがその表現に反映される。

なることも確かに多いであろうが、文法外のルールをうまくコントロールできない時も、それと同等以上に深刻な問題となるのではないだろうか。もちろん、文法や語彙、発音、表記のルールを教えることが外国語教育において重要ではないと言っているのではない。しかし、相手を不愉快にさせる表現を使ってしまった場合、受け手はそこに「悪意」を感じることであり、人間関係にヒビが入る可能性が大きいということである。

人は、どのような物言いをするかによって、「礼儀正しい」、「気品がある」、「失礼な」、「押し付けがましい」、「なれなれしい」、「子供っぽい」など、ある種のパーソナリティを判断されるということも事実である。特に外国語の場合、「伝えたいこと」と「表現」を一致させるのは非常に難しい。コミュニケーションのルールに違反し、相手を困惑させ、本来とは全く異なる人間だと判断される可能性は大いにあり得るのである。

また、待遇表現に関わる問題の場合、文法の間違いに比べ、聞き手が話し手にそれを指摘しにくいという事実もある。指摘したことで、それが、気分を害したということの表明だと受け取られるのではないかと考えるのは自然だからである。つまり、「あなたは今、失礼なことをいいましたよ」とはなかなか言いにくいのである。

そして、失礼さに関わる問題があったとしても、外国人の日本語が流暢であればあるほど、言語習得上の問題だとは受け取られにくいと言える。まだ片言しか話せない外国人がこのような表現を使ったとしたら、「日本語が話せないから」と受けとめることもできるかもしれないが、流暢に日本語を話す外国人がこのような表現を使った場合は、日本人と同等に扱われ、当然その表現の持つ失礼さをわきまえた上で取返そう言っていると受けとられても、なんら不思議ではない。その場合、その表現に対して指摘もされず、「失礼な人」というレッテルをいつのまにか貼られ、日本人との間に溝が生じることになる。そして指摘されない（されにくい）という性質のために、外国人がその失礼さに気づきにくいということになり、その表現を使い続け、「失礼なガイジン」のままあり続けるという事態が生まれるのである。

それから、外国人の「失礼な表現」の原因を言語習得上の問題と考えることができるかどうかは、その日本人の外国人と接した経験の多寡にもよるだろう。しかし、外国人の日本語をよく知っているはずの「日本語教師」でさえ、外国人の日本語に「ムツとする」のである。いかに言語習得に関する問題だと判断されにくいかが分かる。ではなぜ、言語習得上の問題だと判断されにくいのか。それは、「表現形式としてあり得る」からではないだろうか。ここで注意すべき点は、その表現形式がもつ語用論的

意味——相手を不愉快にさせること——を知っていてそう言っているのかどうかという
ことである。外国人にしても日本人にしても相手を不愉快にさせるという事実は変
わらない。しかし、外国人の場合は、その表現の意味論的意味を理解することはすぐ
にできるとしても、語用論的意味まで理解するという事は、特に自分の母語とその
ルールが異なる場合、非常に難しい。

例えば、日本人が「外国人」である場合のことを考えてみよう。日本では、相手の
持ち物について「そのバッグ素敵だね」などと褒めることは一般的に歓迎されるが、
中国では褒めたものを欲しがっていると受け取られるという。それは、日本語のルー
ルと全く違うので、言われなければ知りうるはずもなく、相手とのよい関係を築いて
いるはずの表現が、全く逆のはたらきをしてしまうのである。

このようなことは、外国語教育の教室で教える必要が十分にあるのではないだろう
か。先にあげ外国人の日本語での表現も、日本人を不愉快にさせることを認識してい
てそれらの発言をしたのならば確かに日本語教育の問題ではない。しかし、外国人が、
そういうつもりはないのに、相手の気に障るような表現を知らないうちに使い、日本
人との間に軋轢を生じてしまうとなると、それはとても不幸なことであるので、日本
語教育で十分に取り上げるべきことであると筆者は考えている。

母語話者の間でも、語用論的意味の理解には個人差がある。ただし母語話者の場合
は、語用論的意味の共通認識があるという前提を成り立たせた上でコミュニケーション
は進められる。そして、一般的に外国人にもその前提が適用されることが多いため
に、コミュニケーションの上で問題が生じるのである。

実際にその表現の語用論的意味を理解した上でそう言っているのかどうかは、本人
でない限り分からないのが普通である。しかし、言語・文化の対照研究や待遇表現教
育についての研究が進めば、外国人が待遇表現のどのような問題を起こしやすいかと
いうのは次第に明らかになってくるだろう。本来伝えたい意味とは違う、失礼なメッ
セージを知らない間に送ってしまうことで最も不利益を被るのは、その表現を使っ
てしまった本人である。一般の日本人が指摘しにくい問題であるのならば余計に、日本
語教師は待遇表現に関わる問題についての知識を持ち、適切な指導を行うべき立場に
あると言える。

『国語に関する世論調査』などで「○○について、失礼だと思うか」などという調
査がなされても、「失礼だと思う」人と「失礼だとは思わない」人の数がほぼ半数ずつ
であったり、一般的には「失礼だと思う」人が多い表現でも地域によっては「失礼だ
とは思わない」人の数が多いというようなものもある。それに客観的条件が同じで、

伝えたいことが同じでも、発話主体がどのようなパーソナリティーであるかによって、待遇表現の在り方は大きく異なる²。それは日本語の待遇表現の「常識」を規定し、それを教育することができるのか、ということにつながる。筆者は、「常識」を規定することはしなくても、また「失礼だと思わない」人が半分いたとしても、「失礼だと思」人も半分いるのなら、それを教える必要は十分にあると思う。むしろ「失礼だと思わない」人はこの場合問題ではなく、失礼だと思われる可能性のある表現ならば、学習者がその表現を使うことによって不利益を被る可能性があるということを示すことが重要なのではないかと思う。

待遇表現教育は、学習者が日本語の待遇表現をうまくコントロールできないことによってパーソナリティーを誤解されるといった不利益を被らないためになされるものである。

2. 「～したい（ですか）？」について

2-1. 形式上の丁寧さでは説明できないもの

日本語教育において待遇表現の指導が行われる時の中心は、丁寧体は普通体より、敬語使用は敬語不使用より丁寧さのレベルの高いものだとということにあるように思われる。よって学習者が文末を丁寧体に変えさえすれば、もしくは敬語を使いさえすれば丁寧であると思っても無理はない。確かに「明日東京に行く」より「明日東京に行きます」、さらに「明日東京に参ります」がこの発話だけ見ると丁寧であると考えても問題ないだろう。

では、先に外国人の日本語で不愉快な表現として挙げたものが、ほとんどの例において丁寧体が使用されているにも関わらず、丁寧さに欠ける表現となっているのはなぜだろうか。本章では、日本語学習者が発し問題となることの多い「～たいですか？」という表現を考察することによって、この問題を考えてみたい。

2-2. 「～たい」の用法

「～たい」は、話し手（疑問文の時は聞き手）の行為の実現に対する欲求、願望を表す。

² 芳賀綏（1973）は、対人行動を変容せしめるものは人環境のあり方（客観的条件）と、主体のそなえるもろもろの条件であるとし、主体は「敬語型人間」であるか「非敬語型人間」であるかという観点から分けられると考察している。

「～たい」の用法として、人称制限や、助詞「を」「が」の交替³については重点的に指導されている。つまり、

一人称 「私はコーヒーが飲みたいです」

二人称 「あなたもコーヒーが飲みたいですか」

三人称 「彼はコーヒーを飲みたがっています」

と教えることは一般的であろう。

しかし、丁寧体を使うべき相手、つまり上位に待遇すべき相手に「～たいですか」と尋ねることが、そもそも日本語において可能であろうか。「(コーヒーを) どうぞ」などと勧めの表現を使うか、「コーヒー、いかがですか」のような、聞き手の意見を問う形にするのが望ましいのではないか。

疑問文に現れる「たい」の、以下の例を見てみよう。以下、用例の×印は丁寧さに欠けるもの、○印は丁寧さが保てるものであることを示す。

a. ×先生もコーヒーが飲みたい？

b. ×先生もコーヒーが飲みたいですか？

c. ×先生もコーヒーをお飲みになりたいたいですか？ (/召しあがりたいですか？)

「先生」を相手に普通体で問い掛ける a から、「敬意」を表す時に使われるとされる尊敬語を使用した c まで、全て丁寧さを欠く発話となっている。

英語では“Would you like to ___?” という表現は、相手の意思を尊重することから丁寧な表現だとされているが、日本語では、これらは敬語を使っても丁寧さを欠く、不適格な表現となり、狭義の敬語では説明できない。

文法の練習だけで、どのような場合は使えないかということ「教えない」場合、さらには文法を教えるためにはやむをえないとして丁寧さと衝突する日本語であるにも関わらずそれを「教えた」場合、外国人学習者が授業で習った通りに「コーヒーが飲みたいですか」と言ったとしても、教師がそれを責めることはできない。日本語教科書に日本語の全てを盛り込むことなどできないし、また日本語教育機関では日本語の全てを教える必要もないという事実を認めたとしても、日本語教育で「教えられた」日本語により、学習者が一般の日本人との間に軋轢を生じるのは、いかがなものか。

次節では、「～たいですか」が丁寧さと衝突することについて、主に鈴木陸(1989)、熊井浩子(1989)、大石久実子(1997)の考察を参照しながら考えていくことにする。

³ 「水を飲みます」→「水が(／を)飲みたいです」

2-3. 「～たい（ですか）？」に関する先行研究とその問題点

鈴木（1989）は、「～たいですか」という疑問文が丁寧さと衝突する事情を《聞き手の私的領域》という考えから説明する。

発話の内容が聞き手の欲求・願望・意志・感情・感覚など、個人のアイデンティティに深く関わる私的領域に抵触する時、聞き手は自己のテリトリーが侵害されたと感じ、丁寧さに欠けると感じることもあるという。「たい」は欲求・願望を表すため、それを用いた疑問文の場合、《聞き手の私的領域》に踏み込むことになり、丁寧さを欠く表現となる。

× 先生、コーヒーがお飲みになりたいですか。

丁寧さを保つために、聞き手の欲求には言及しない、つまり《聞き手の私的領域》に踏み込むことを回避するためには、次の三つの方法があるとする。

1) 〈聞き手の領域〉に属する事柄のうち、《聞き手の私的領域》よりも制限の弱い「聞き手の行動」について述べる。

○ 先生、コーヒー飲みますか／召し上がりますか

2) 〈話し手の領域〉に関することがらについて述べる。

○ 先生、コーヒーでも入れましょうか／お入れしましょうか

3) 〈中立の領域〉に関することがらについて述べる。

○ 先生、コーヒーが入りました

○ コーヒーです

ただし鈴木（1989）は、丁寧さのルールに従わなければならないのは、丁寧さに配慮しなければならない相手だけであり、普通体で話すような親しい関係ならば、「たい」を用いた疑問文でも失礼ではないとする。

○ みっちゃん、コーヒー飲みたい？入れたげようか。

最近の日本語の教材では「～たいですか」は丁寧さに欠けるので使ってはならないと注記してあるものがあるが、その説明は鈴木の本主張に倣っており、親しい間柄ならば「～たい？」という疑問文を使っても良いとしているものが多いようである。

筆者の内省では、鈴木が親しい相手なら普通体で問題とならないとして挙げた上記の例文も、いささか失礼な印象を受ける。丁寧体を使う相手のみではなく、普通体を使うような親しい相手であっても《聞き手の私的領域》に踏み込んではいけないことに変わりはない気がするからである。

○ みっちゃん、コーヒー飲む？／コーヒーでも入れようか
／コーヒー入ったよ

などの発話が普通体世界においても望ましいのではないだろうか。

大石（1997）は、日本語の願望疑問文の使用制約について、敬語を使う必要のある人間関係では「聞き手の私的領域を侵害する」行為と見なされ、願望疑問文が許容されないが、日本語の願望疑問文は全てが許容されないという訳ではないとの考えにより、話し手と聞き手の関係を親しい間柄で敬語を使う必要のない関係に限定し、どのような場合に許容されやすく、どのような場合に許容されにくいかということを、記述式アンケートによって調査している。大石（1997）の論旨とはずれるが、その結果から、親しい間柄でも「～たい？」と聞くことを「すごくおかしい」、「おかしい」、「許すが使わず」と感じる場合があるという回答が多かったことが分かる。この結果から考えても、「～たい？」は普通体で話す親しい相手になら使っても良いと単純に説明するのは、多少危険なのではないだろうか。

熊井浩子（1989）は、待遇表現とは何かということを念頭におきつつ、話し手と聞き手の双方に関わる「負担・利益」の観点から、それが丁寧さとどのような関係を持っているかを考察している。熊井は鈴木（1989）の考えも取り入れた上で、いくら親しい相手であっても、不適格になる場合があると主張する。次のような場合である。

1) 相手の負担によって話し手が利益を受ける場合

〈作文の推敲を頼む〉ような場面で、「先生、いつ私の作文が読みたいですか／お読みになりたいですか」はもちろんのこと、親しい相手に「いつ私の作文が読みたい？」というのも不適格である。

2) 話し手が権限を持たない相手の当然の権利である場合

例えば〈相手から借りた本をもう少し借りていたい場合〉「先生、この本返して欲しいですか」「先生、今日この本読みたいですか」はもちろんのこと、親しい相手に「今日この本読みたい？」というのも不適格である。

3) 相手及び話し手の利益になる場合

例えば〈パーティーに誘う〉場面で、「先生、一緒にパーティーに行きたいですか／いらっしゃりたいですか」はもちろんのこと、親しい相手に「一緒にパーティーに行きたい？」というのも不適格である。熊井は、「誘う」「招待する」という行為には「相手に利益・恩恵を与える以上に、話し手自身がそれによって利益・恩恵を受けるという意味が含まれているのではないかと推測している。それにも関わらず「誘う」場面で「たい」を使い直接相手の希望を聞くと、相手の「行く」という行為によって話し手自身が利益・恩恵を受けるという意味がなくなり、〈私はあなたに来てもらいたいと特に希望しているわけではないが、あなたの希望は

どうか。もし行きたいなら連れて行ってあげる」というように、話し手が選択権を持ち、相手に利益・恩恵を与えることを強調した、話し手優位の表現となるので不適格であるとする。

4) 話し手の負担によって相手の利益になる場合

例えば、〈相手に本を貸すことを申し出る〉場面で、「先生、この本読みたいですか／お読みになりたいですか?」は不適格である。親しい相手であっても、「この本読みたい?」より「この本読む?」の方が丁寧であるとする。それは、「本を読む」ことは通常読む本人の利益であるから、話し手が相手に利益を与えることを強調することになるからである。

熊井は、「たい」を用いても不適格とされない疑問文は、「話し手と関わりのない相手の行為について相手の希望を尋ねる場合」であるとする。例えば、〈見たい映画の話をしている場面〉で、「先生も「レインマン」見たいですか／ご覧になりたいですか?」などは、相手の行為が話し手と直接関係のない、話し手の利益とも無関係な行為であるので、やや丁寧さには欠けるが、さほど失礼ではないようであると述べている。

熊井が設定している〈見たい映画の話をしている場面〉というものは、この説明だけで十分に想像することはできず、具体的にどのような場面なのか分からないが、熊井の内省としては「やや丁寧さには欠けるがさほど失礼ではない」ということである。ただし、この場面設定でこの例文を「失礼だ」と捉えるか「さほど失礼でない」と捉えるかは、母語話者でも判断に揺れがあるものではないだろうか。

しかし、「相手の行為が話し手と直接関係のない場合に許容度が上がる」という説明は、ある程度的を射たものであると思われる。例えば、海外で活躍中の日本人が一時帰国したときに受けたインタビューとして「この帰国中に何をなさりたいですか?」というものがあったが、これはほぼ完全に許容されると考えてよいだろう。

そして熊井は、実際の日本語教育場面における指導の際の留意点を、次のように述べている。

「ただし、ある文型をはじめて提出する時や、ほかの的確な表現をまだ指導していない段階で、あまりこまごまとした待遇上の制約を教えることは学習者の使おうとする意欲をそぐことになるし、文型の形としてのむずかしさと用法のむずかしさが同時に学習者を襲うことになるわけであるから、必ずしも望ましい方法であるとは言えない。学習者が形にも慣れ、ある程度同じ機能を担って使われるレパトリーが揃った段階で、別々に学習してきた表現を機能という観点から再編成し、それぞれのもつ待遇の意味に注意させ、レパトリーの中から場面に

応じて最も適切な表現を選択させるための指導を行うことが有効である。」

熊井が言うように、一度に全てのことを指導することには無理があり、段階を追った指導がなされるべきであるが、ただ学習者を「形に慣れ」るだけ慣らしておいて、実はその言い方は日本語では失礼ですよというのはどうかと疑問に思う。例えば、「～たいですか」という表現にしても、「たい」が疑問文で使われる時は相手のことしか表さないという「形式」を記憶させるために、「コーヒーが飲みたいですか？」というフレーズを散々リピートさせておいて、しばらく経ってから「その表現は失礼ですよ」などと言っても、学習者はかえって混乱するのではないか。

筆者は、待遇表現教育は、少なくとも「形式」と同等程度に、「おまけ」としてではなく「優先的」に行う必要があると考えている。具体的な方法として、「～たいですか」は相手のことしか表さないということ、そしてそれは失礼な表現となりうるということを経由し、その「形式」の練習は行わない。そして、外国語を日本語に直訳すると「～たいですか」という言葉で表されやすい「誘い」や「勧め」などの表現形式を、日本語ではどのように言う、ということを入力する方が現実的ではないかと思う。

2-4. 日本語初級教科書における扱い

2-4-1. 教科書について

本章では、実際の日本語教科書は「たい」をどのように扱っているのかということ进行分析する。分析する教科書は、一度バルバラ・ピッツィコーニ（1997）『待遇表現から見た日本語教科書』という先行研究においてその待遇表現教育についての態度が取り上げられているものである。

ピッツィコーニ（1997）は、これらの教科書に現れる待遇表現を拾い上げ、その項目の提出課、形式、テキストで取り上げられている場所（ダイアログ、文型、語彙、など）、その項目についての教科書作成者の記述、カテゴリー（文体、呼称、授受動詞、挨拶、決まり言葉、など）をチェックリストにして整理し、本文・モデル会話の特徴や、提供されている解説と定義、練習の種類と数、待遇表現の項目がどのように配列されているかなどの観点から分析している。

筆者は、これらの教科書が、疑問文で使用されると問題となりやすい「～たい」をどのように提示しているかということに絞って分析する。当然だが、「～たいですか」という項目をうまく提示しているからといって、またはうまく提示していないからといって、ある教科書の待遇表現教育に対する総合的評価を行うことはできない。また、

筆者が分析する「～たいですか」という表現は、待遇表現というとても大きなカテゴリーの一部をなすものである。それから、例え或る教科書を待遇表現教育上問題があると分析したとしても、その教科書の存在意義を全否定するつもりはないことを断っておきたい。あくまでも待遇表現教育上の問題であって、適切な待遇表現を身につけることを直接望まないような教育もあるからである⁴。

ここで分析する五種の教科書は、ピッツィコーニによると出版年と関係なく、最も構造主義的色彩の強いものから、コミュニカティブ・アプローチに近いものへと配列してある。日本語教育史において重要なものもあれば、アプローチの独特なものもある。

2-4-2. 『初級日本語』（『初級』と略す）

本書の「たい」は、第十四課において提出され、会話文と、「文型」、「新しい言葉」で扱われている。しかし、「～たいですか」という疑問文は、会話文にのみ現れ、「文型」としては扱われていない。「文型」として取り上げられているのは一人称の「たい」について、また「たい」が取る格のいくつか（ニ・ト・ガ・ヲ）について、それから三人称について述べる際の言い方である。

一文だけ「～たいですか」がでるのは、会話文で登場人物の「小林」が「ジョンソン」に「どんなカメラが買いたいですか」と言うところであるが、この文について見てみると、この文は、割りとし礼さが感じられない発話となっているといえる。なぜならば、まずこの会話文は登場人物が日本人学生と留学生という設定で、二人とも丁寧体で話しているけれども、ジョンソンが小林の家に遊びに来ている場面であり、一緒に買物や公園に出かけたりもしていることを考えると、どちらかが心理的に上にいるわけでもなく、ある程度くだけた、普通体で話しても良いような関係であると考えられる。それに小林のこの発言はジョンソンが「新しいカメラが買いたい」と言っていることを受けて小林が言ったものであり、「話し手と関わりのない相手の行為について相手の希望を尋ねる場合」（熊井が許容されるとしたもの）である。よって「たい」の疑問文であるが失礼さは感じられないものとなっているのである。

この教科書には媒介語による文法説明などが無いので、教師次第でこの素材をどう扱うこともできる。つまり、その項目をどうやって教えるのかということは教師の一

⁴ 例えば、ネウストブニー（1982）の言う「体制維持」の教育、つまり海外の大学などの教育機関のカリキュラムとして「日本語」が組み込まれているような場合、単位を取るためだけに「学ぶ」学習者にとっては、発音だけ教える授業でも特に問題は生じないだろう。

手に掛かっていると云える。

ただし、「～たいですか」が失礼さを伴うことがあるということを示さない限り、「どんなカメラが買いたいですか」が問題ないのだから「コーヒーが飲みたいですか」に問題があるとは思ってもせず、そう言ってしまう可能性も十分にあるだろう。

2-4-3. An Introduction to Modern Japanese (IMJ)

この教科書が他の四つと異なる点は、「～たいですか」が一文も出てこないところである。『初級』では会話文中には出てくるものの「文型」として取り上げられていないことから、それをどう教えるかは教師の判断によると述べたが、この教科書では一文さえ出てこない。『教授法の手引き』にも、ここでの指導項目として特記されているのは、「～たい」を原則として一人称に使うこと、「～たいです」の形よりは「～たいと思う」の方を重点的に教えることくらいである。「～たいですか」については何も触れられていない。

教師が、教科書通りに進め、「～たいですか」については全く触れずに次に進むことも可能であるし、学習者がこの教科書を用いて独学する場合は「～たいですか」について何か疑問に思うこともなく次へ進むだろう。「～たいですか」を、失礼さを伴う例文で何度も繰り返して練習するような方法よりはこの態度の方が受け入れられる。しかし、学習者が教室を離れ、いざ日本社会に出たとき誰かに、「コーヒーが飲みたいですか」と言ってしまう可能性も否めない。

この「～たい」が提示されている課では「～つもり」も学習項目の一つであるが、「～つもり」は、意志・意図を表すという点で、「～たい」と同様「私的領域」にある表現であるので、疑問文で使われると失礼さを伴う場合があり、問題となる場合がある。次のような場合である。

× 先生は私達と一緒にご飯を召し上がるおつもりですか。

これも十五課では一人称についての記述しかない。しかしその後の十七課の Dialogue で、自動車を買ってしまったと言う日本人に対して「ジョンソン」が「もう一度買うつもりですか」と問いかけているところがある。この「～つもりですか」について 'Explanation' では、“Tsumori can be used to refer to the intention of one's equals and inferiors, but not to that of one's superiors.” と説明している。つまり、「～つもり」は同等か目下の人に対しては使って良いけれども、目上の人には使ってはならない」ということである。この説明を受けた学習者は、それをしっかり学び、「～つもりですか」を目上の人を使うことはしないかもしれない。けれども、それがなぜ目上の人には使ってはな

らない「失礼さ」を伴う表現であるのかと言った説明は一切ないので、応用が利かない。つまり「～つもりですか」は言わなくても、目上の人に「～たいですか」ということはありうるし、「～が欲しいですか」ということもあるだろう。理由は示さず「目上の人には使ってはならない」ということを「つもり」に特記するのなら、「たい」にも「欲しい」にも特記すべきではないだろうか。

2-4-4. Japanese: the Spoken Language (JSL)

本書は、文法に対する詳しい説明が特徴的であるが、「たい」についても Structural Patterns で非常に詳しい説明がなされている。丁寧体・普通体それぞれにおいての語形変化の方法や、助詞「を」「が」の交替について、またしばしば「～んです」と共に用いられやすいという特徴、アクセントなどについて説明があるが、「～たいですか」のはらむ問題については次のように説明している。

(JSL p.179 より抜粋)

In statements, the -tai form regularly refers to something the speaker wants to do him/herself. Insofar as it occurs in questions, it usually refers to the addressee, but this usage does NOT represent the invitational implications of most English questions like 'Do you want to ___?' 'Would you like to ___?' You will remember that such invitations are expressed in Japanese by the negative imperfective of verbals, Compare:

Asita mo kimasen ka and 'Won't you (i.e. wouldn't
you like to) come again
tomorrow?/invitation/

Asita mo kitai n desu ka 'Is it the case that you
want to come again
tomorrow?'
/non-invitation/

(以上)

ここでは、「たい」は疑問文では必ず聞き手について述べるものであるが、英語の 'Do you want to ___?' や 'Would you like to ___?' などの表現が表す「誘い」の意味は持たないということに注意しなければならないと述べている。そして、「誘い」を表すのは「～ませんか」など否定の未来(現在)形であると説明している。しかし、「～たいで

すか」が「誘い」の表現にならない理由として、聞き手の欲求を尋ねることが失礼さを伴うといった説明はなされていない。

確かに学習者が「誘い」のつもりで「パーティーに来たいですか」などといってしまうことは多いので、「誘い」にはならないということを示すことも有益であると考えられる。しかし、この説明のみでは「誘い」ではなく「宿題が見たいですか」や「コーヒーが飲みたいですか」など、「依頼」や「勧め」などの表現として「～たいですか」と言ってしまうことまでは制御できないだろう。

2-4-5. Communicating in Japanese (CIJ)

本書は「文法」の中で、「たい」の語形変化についても、疑問文で用いられる時の制約についても詳しく述べている。疑問文で用いられる時の制約について述べている部分を抜粋する。

A question using this pattern can be used to address a second person only if that person and you are very close. In Japanese, asking about feelings or desires is considered rude; adults in Japan traditionally and customarily do not express their feelings and desires in a straightforward manner unless they are dealing with those with whom they are reasonably intimate.

English speakers in the beginning stages of learning Japanese tend to say “コーヒーを飲みたいですか” thinking that it is equivalent to “Would you like some coffee?” This is, however, not the case. You should say “コーヒー、どう／いかがですか” or “コーヒー、飲みませんか”.

(以上)

「たい」は疑問文では聞き手のことしか表さないが、聞き手がごく親しい人物でない限り使うことはできないと述べている。そしてその理由は、日本語では感情や願望について直接的に尋ねることは、聞き手がかなり親しい人の場合以外は失礼であるからだと説明している。

そして、初級段階にある英語話者は‘Would you like some coffee?’という表現と同等だとして「コーヒーを飲みたいですか」と言いがちであるが、英語と日本語のこの表現は同等ではないと説明し、「コーヒー、どう／いかがですか」や「コーヒー、飲みませんか」と言うべきだと述べている。

この説明は、教科書作成者が「～たいですか」の問題をかなり意識して学習者に提

示しており、ある程度において的を射た説明になっているといえる。だが、熊井が述べているようなどんなに親しい相手でも「～たい？」と言った場合に不適格になる場合がある、という性質までは考慮されていない。

2-4-6. Situational Functional Japanese (SFJ)

本書では、「たい」の形式のルールについて説明されている Grammar Notes, そして練習である Tasks and Activities に「～たいですか」が提示されている。

Grammar Notes の、「たい」についての Explanation の中で、人称制限について説明されている部分 ‘Subject of the sentence’ には「飲みたいですか」という表現、さらに、助詞の交替について説明している部分 ‘が as object particle’ には「コーヒーが飲みたいですか」という表現が載せられており、それが失礼さを伴うといった説明は全くない。

Grammar Notes では文型を提示するためだけに「～たいですか」を使用している。疑問文の人称制限について説明している部分を引用する。

Subject of the sentence

The subject of ～たいです statement is always I or we, whereas when used in a question ～たいですか it is always you. As the subject is obvious, it is usually omitted:

1. 飲みたいです。

I want to drink.

2. 飲みたいですか。

Do you want to drink?

(以上)

このような提示の方法は、今までの議論を見れば分かる通り、「たい」の適切な運用を目指すためには最も避けたいものである。

繰り返し述べるが、英語の ‘Do you want to drink coffee?’ は適切な「勧め」の表現となりうるが、日本語の「コーヒーが飲みたいですか？」は発話者が「勧め」の意で用いても失礼さを帯び、聞き手には勧めとはとられないことが多い表現であるので、そもそも「飲みたいですか」と ‘Do you want to drink?’ を同等であるかのごとく並べることはやってはならないことである。

「たい」が疑問文においては聞き手のことしか表さないという人称制限を教えることと、「～たいですか」と相手の欲求を尋ねることが失礼になるという待遇表現による

制約を教えることの重要性を考えると、やはり後者が優先的に教えられるべきものであると筆者は考えている。

また、Tasks and activities では、「あなたが心地よいと思う休日を過ごすために次の質問に答えて進みなさい」というところで、「山へ行きたいですか」「歌舞伎が見たいですか」などといった「～たいですか」を使用した疑問文によってタスクが行われるようになっている。確かにこのようなゲーム性のあるもので「～たいですか」を使用しても、失礼さは伴わない。しかし、「～たいですか」が時として失礼さを伴うということを学ぶ箇所はない上に、タスクとしてこのようなものを与えると、これを終えた学習者には強烈に「～たいですか」の形がインプットされ、「～たいですか」に失礼さが伴うなどとは思ってもせずこの表現を使うようになるであろう。学習者が実際に「田中さんもコーヒーが飲みたいですか」と言ったとして、そこでその表現は失礼だと注意しても、学習者を混乱させるだけである。

2-5. 「～たい（ですか）？」についてのまとめ

ピッツィコーニは、異なるアプローチによって待遇表現教育上のような長所と短所が生じるかを論じている。そして「コミュニケーション・スキルを強調してきたアプローチでは当然待遇表現への新しい興味を期待できる」と述べている。しかし、「たい」という項目に絞ってそれぞれの教科書を見てみると、待遇表現教育に対して積極的な教科書だと判断されているものが必ずしも「たい」という項目の待遇表現上の制約に対してうまく提示しているというわけではないことがわかった。

最後に、「～たい（ですか）？」を提出するときの注意点についてまとめておく。

人称制限について提示するときも、失礼さを伴わない例文を用いるべきである。「～たい（ですか）？」で聞き手の願望・欲求を聞くことは、聞き手の私的領域に踏み込むことになり、日本語母語話者には不快感をもたらすことが多い。それは、丁寧さを必要とする場面はもちろん、親しい間柄であっても使わない方が無難であるということを示す。学習者が「～たい（ですか）？」を用いて表しがちな「誘い」「依頼」「勧め」などの表現を、日本語ではどのように表すか示す。「～たい（ですか）？」という形式の練習は行わない。

教科書とはそれを用いる教師や学習者によって、学習全体の中での位置付けも、使用方法も全く異なってくる。「～たい」の扱いに問題がある教科書を、問題を残したまま学習者に提示するか、修正した形で提示するかは、教師次第であるといえる。

3. 結び

先に、日本語教師が違和感や不快感をもつ学習者の表現を紹介した。『月刊日本語』のこの特集では続けて「その言葉を言われた時、あなたはどうか対処しましたか」というアンケートがなされている。「その場で注意した」が38人、「後で注意した」が26人であるが、それに対して「学習過程にはあることだから黙認した（いちいち注意はしない）」と解答した人が35人いる。

確かに、「学習過程にはあること」だろう。しかし、それは日本語教育で「教えた」もしくは「教えなかった」日本語に起因する問題だということを忘れてはならない。大切なのは、学習者のそれぞれの発話が日本社会でどのような印象を持って受けとめられるかということを示すことであり、話し手が自分の意図したことを発話に正しく反映できるようにするということである。そして、学習項目の導入期である初級段階で、適切な教育を行えば学習者がこれらの表現を使うことも少なくなるということを経験は念頭に置き、指導に当たるべきであるということをおぼえてはならない。

参考文献

- ・青山一太郎（1988）「教科書には何が必要か」『月刊日本語』アルク
- ・（1993. 11）[特集] 先生、あなたはよくできました『月刊日本語』アルク
- ・宇佐美まゆみ（2001）「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」『談話のポライトネス』国立国語研究所
- ・馬瀬良雄・岡野ひさの・伊東祥子（1988）「外国人の言語行動に対する日本人の意識」『日本語教育69号』日本語教育学会
- ・大石久実子（1996）「「～（し）たいですか？」に代表される願望伺いについて—オーストラリア英語母語話者と日本語母語話者の接触場面での問題—」『日本語教育91号』日本語教育学会
- ・大石久実子（1997）「日本語の願望疑問文の使用制約——「～したい？」「～してほしい？」を中心とするアンケート調査をもとに——」『日本語と日本語教育』第26号 慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
- ・大石久実子（1998）「接触場面での上級日本語学習者の願望疑問文の問題」『世界の日本語教育』8 国際交流基金日本語国際センター
- ・大石初太郎（1975）『敬語』筑摩書房
- ・熊井浩子（1989）「待遇表現指導の一視点—「ほしい・たい」を中心にして—」日本語学校論集16、東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- ・国立国語研究所（1990）『敬語教育の基本問題（上）』大蔵省印刷局

- ・ 国立国語研究所 (1992) 『敬語教育の基本問題 (下)』 大蔵省印刷局
- ・ 斎藤修一 (1986) 「教科書論」『日本語教育59号』 日本語教育学会
- ・ 親屋映子・守屋三千代・姫野伴子 (1999) 『日本語教科書の落とし穴』 アルク
- ・ 鈴木睦 (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』
- ・ ネウストプニー, J.V. (1982) 『外国人とのコミュニケーション』 岩波新書
- ・ 芳賀綏 (1973) 「敬語・態度・行為」『敬語講座 7 行動の中の敬語』 明治書院
- ・ ピッツィコーニ, バルバラ (1997) 『待遇表現から見た日本語教科書—初級教科書5種の分析と批判—』 くろしお出版
- ・ 水谷修 (1986) 「教科書に現れた言語行動」『日本語教育59号』 日本語教育学会
- ・ 水谷信子 (1989) 「待遇表現指導の方法」『日本語教育69号』 日本語教育学会
- ・ 南不二男 (1987) 『敬語』 岩波新書
- ・ 山下秀雄 (1989) 「日本語教育における初級と待遇表現」『日本語教育69号』 日本語教育学会
- ・ 文化庁文化庁国語科 『平成7年度 国語に関する世論調査』

〈教科書〉

- ・ 東京外国語大学付属日本語学校 (1990) 『初級日本語』 三省堂
- ・ Osamu and Nobuko Mizutani, (1977) An Introduction to Modern Japanese, The Japan Times
- ・ Eleanor Harz Jorden and Mari Noda, (1987-1990), Japanese: the Spoken Language, Part1, 2, 3, Kodansha
- ・ Hiroyoshi Noto, (1992), Communicating in Japanese, Sotakusha
- ・ Tsukuba Language Group, (1992), Situational Functional Japanese, Bonjinsha